

## FP Topics = 長期積立分散投資の勧め = 2022年4月号

桜も終わり、日を追うごとに暖かくなります。  
 良い季節になりましたが、コロナ禍はまだまだ予断を許さないようです。日常が戻ることを祈るばかりです。今月も引き続き人生100年時代の内容です。  
 なぜ、お金の置き場所を考える必要があるのか？  
 欧米と比較した日本の金融事情などから資産運用の必要性を解説してみたいと思います。

### = 危機感を抱く金融庁 =

日本国民は、個人金融資産をどれくらい保有しているかご存じでしょうか？金融庁の“2017年金融レポート”では日本人全体で1,815兆円です。これを多いとみるか否かは難しいところです。年代別に見ると、60歳以上がその7割を保有しています。

年金事情も相まって、高齢層は漠然とした不安からお金を使わず、そのほとんどを貯蓄しているようです。お金が世の中にでてきていないのです。わずかな預金金利ではお金はほとんど増えません。

一方、欧米の個人金融資産も、前出の“2017年金融レポート”で確認することができます。同年の統計でアメリカ人全体の個人金融資産は8,821兆円です。この大きな開きは金融教育の差とみられます。

欧米諸国では、学校教育の中で資産運用がカリキュラムとして取り入れられており、資産運用の基本的な知識は比較的高くなっているのも一因です。対照的に日本では、感覚的にお金の話はタブー視される傾向にあったように思います。

その結果、上記のように保有金融資産に大きな開きがでています。ちなみに2021年の統計では、日本の個人金融資産は2,023兆円となっていますが、アメリカのそれは12,667兆円です。徐々に開きが大きくなっているようです。



### = 投機と投資の違い =

日本人が抱く資産運用のイメージは、危険・難しい・損をするなど、どちらかと言うとマイナスの想いが強いようです。これは、四六時中ディスプレイに張り付いて、株式等を売り買いする行為を資産運用と勘違いしているからだと思います。

株式等の短期的な売買利益に期待して、資金を運用する行為は投資ではなく**投機**です。株式市場における短期的な株式等の売買は、誰かが儲けると誰かがその分損をすることになっています。まさに儲ける機会を窺うゼロサムゲームです。

自分の仕事を持って、真摯に暮らしと向き合う生活者にとって、短期的な株式投資はあまり良い手法ではないと感じています。リスクを上手に回避して、日々の生活に負担がない範囲で、お金にも働いてもらう資産運用の手法が《**長期積立分散投資**》です。

長期積立分散投資は、金融庁も強く推奨している投資手法です。具体的には、つみたてNISAやiDeCoといった制度ですが、一度は耳にしたことのあるものではないでしょうか。危機感を抱いている金融庁は高等学校等において金融経済教育を実施しています。

長期積立分散投資は、アインシュタインも絶賛した複利効果を利用したものです。下記のイラストのようにリスクを上手に分散し、長期に亘って資産を形成する資産運用の手法です。

分散投資の例

出典：金融庁



## ＝長期積立分散投資＝

リスクを上手に分散して、資産を運用する分散投資には《資産の分散》《地域の分散》《時間の分散》という考え方があります。

### 【資産の分散】

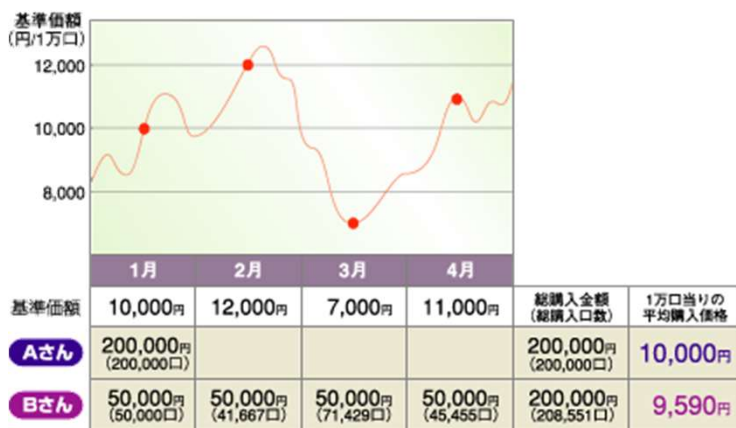
投資の対象となるものには、株式・債券等さまざまな銘柄があります。それぞれの資産（銘柄）はその特性ごとに異なった値動きが考えられます。株式と債券では、経済状況により真逆の動きをすることが多いといわれています。このような特性を活かして、投資信託等を利用するリスク回避です。

### 【地域の分散】

投資信託等を利用した投資対象には、日本以外の地域の銘柄も存在します。こうした異なる地域の特性を活かして、国内と国外また先進国と新興国といったように地域や通貨を分散してリスクを回避しますが、カントリーリスクや為替変動といったリスクも加味しなければなりません。

### 【時間の分散】

資産や地域の分散では、個々の特性に応じてさまざまな値動きが考えられます。そこで、単発で多額の投資をするのではなく、少額を定額で定期的に投資を行うことで、時間的なリスクを軽減する手法です。絶対ではありませんが、長期的に投資価格を平準化する効果があります。



図解はAさん（一括購入）Bさん（積立）による、平均購入価格のシミュレーションです。Bさんは基準価格の上がり下がり気にせず、毎月淡々と5万円ずつ定額で購入（投資）し続けています。

平均購入価格は（B）9,590 < （A）10,000で安く購入できています。長期積立分散投資は、相場（値動き）を気にすることなく、長期に亘って投資することにより、中長期的な資産を形成する手法です。詳細は次回に続きます！

## ～今月の山便り～

難所を超え、やれやれと一安心しました。しかし踏み跡（進むべき方向）はもうまったく見えなくなっていました。辺りを見回すと、右の方に少しスペースがあるようです。

足を踏み入れると、丁度テント一張分くらいのスペースが開けています。やったー！と喜んで周辺を確認してみると、木の根元にお札がお供えしてあります。どうやら靡（なびき）のようです。祈りの場所です。

あまり気持ちよくはないですが、窮地に仏といったところでしょうか。ふと見ると、その先は谷に向かって降っているようです。ヘッドランプを向けてみると、燃えるように紅葉する一本の木が鮮明に映し出されました。

気づくとその木に誘われるよう、狭い谷を降り始めたのです。燃えるように紅葉したその木に、あと数歩でたどり着きそうなその刹那、ふっと我に返りダメだダメだ行ってはいけない！もう一人の自分が語りかけたのかもしれない。

あの谷を降っていたら帰って来れなかったかもしれません。我に返り、靡きの小さな空間へ戻りました。谷に背を向けて登り返している時間、背中に何かの気配を感じていたことは、いまでもありありと記憶に残っています。

雨は本降りになってきました。急いで靡きのスペースにテントを設営します。設営中、全ての装備が雨にさらされます。長期山行で避難小屋利用を前提としていたことから、軽量化のためテントの雨除け（レインカバー）を携行していませんでした。

テントを設営し、装備を運び入れている端からテントの中は水浸しです。レインカバーのないテント内は容赦なく雨が降ってきます。ビバーク地は標高1600mを少し超えた地点。秋山はかなり冷え込むのです。普段レインウェアのズボンには携行しませんが、幸運にもこの時は上下を持っていました。

急いでレインウェアのズボンを履き、少しでも暖を取ろうと画策し始めましたが、まったく上手くいきません。ガスストーブもライターも一瞬で濡れてしまい、使い物にならなくなりました。なんとか天井からの水責めを凌ごうとするのですが・・・